

論 文

音楽経験者・未経験者における読譜力育成に向けた取り組み —課題考案とデータ分析を中心に—

二宮貴之・櫻井琴音

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成22年11月30日受理)

Effort to Nurture Score Reading Ability of Experienced and Inexperienced Groups in Music —Focus on Problem Creation and Data Analysis—

Takayuki NINOMIYA and Kotone SAKURAI

(Faculty of Children's Studies Department of Children's Studies)

(Accepted November 30, 2010)

Abstract

Our attempts took place to level up score reading ability targeting students experienced and inexperienced in music. The content of our attempts is as follows: we devised our original assignments based on reference to piano lesson textbooks and conducted a data analysis at the result of assignments. And we also conducted a questionnaire survey to check the way how students read music scores. The result of the survey has shown that students with insufficient learning on music are certain to acquire score reading ability and even students with sufficient learning on music will also further heighten the score reading ability. In other words, our attempts continue just for short period for four minutes or so per one time, but it can surely result in a favorable result.

Key words : Score Reading Ability 読譜力
Music Education 音楽教育
Piano ピアノ
Teaching Materials Development 教材開発

I. はじめに

これまで多くの教員・保育士養成校において読譜力育成に向けた取り組みがなされてきた¹⁻³⁾。しかし、読譜力を育成するための即時効果が得られるような教材は存在せず、今なおこの事に強い課題意識を持ち続けながら学生と向き合う音楽教育者が多数存在する。筆者等もその中の一人であり、常日頃から学生たちに音楽力の基礎である、読譜力を身につけさせることに苦慮してきた。

ピアノ初心者の読譜力育成に関する先行研究の中で小倉は、「初心者がピアノの授業の中で適切な進度を確保できない理由の一つに、読譜力の脆弱さがあげられる」(2007)と述べている⁴⁾。また、小池らは「楽譜が読めないということが鍵盤に向かう以前の大きい問題になっている様子がうかがえる」(2005)と指摘している⁵⁾。これら実践研究で示された学生の実態は、本学の学生の実態とも合致するものであった。また、小学校学習指導要領解説の中では「楽譜と音との関連を意識しながら、音楽の流れを感じ取って楽しく読譜することに慣れるよう指導することが大切である」(2008)と読譜指導の必要性を述べている⁶⁾。そこで筆者らは、上記の研究結果および内容を踏まえ、音程、リズム、視唱、階名読み等、多岐に渡る読譜力の中でも本学の学生にとって最も必要不可欠だと思われる読譜力、すなわちドレミでの階名読みをさせることに注力して取り組んでみた。実践にあたっては、本学の学生の音楽学習経験を考慮しながら、本学独自の読譜課題を作成し、実践研究に取り組んだ。

本論では、読譜力育成に向けた取り組みの成果について、実践プロセス、課題作成過程、読譜課題採点結果の分析、アンケート調査結果を報告するとともに、この取り組みの有用性と今後の課題について考察する。

II. 研究方法

1) 調査対象

本学子ども学部子ども学科平成22年度1年次生96名(男子48名、女子48名)

本研究対象学生の音楽学習経験別内訳は下記の通りである。

- ①ピアノ等の楽器のレッスン未経験者は56名(58.3%)

- ②ピアノ等の楽器のレッスン経験者40名(41.6%)
そのうち4名は吹奏楽や合唱等の音楽系部活動のみの経験者である。

2) 調査場所

本学の Music Laboratory (ML 教室)

3) 調査時期

平成22年4月～7月までの期間中、計13回実施(現在、継続中)。

4) 科目

櫻井、二宮が担当している「ピアノ」の授業内で実施した。

5) 読譜課題の実施方法

- ①本学の「ピアノ」や「音楽表現指導法」の授業で全学生が使用しているピアノテキスト、および子どもの歌の曲集の音域を調べ、それに即した読譜課題を独自に作成して用いた⁷⁻⁸⁾。なお、本学の「ピアノ」授業の中で使用するテキストの中には、弾き歌いの曲も含まれているため、今回は、ピアノテキストの中にある曲を中心に調べ、子どもの歌の曲集については、参考資料として扱った。
- ②毎回、「ピアノ」の授業開始直後に4種類の課題の楽譜を配布し、1課題1分間という時間制限の中で、できるだけ沢山の音符に階名を書き込むよう指示した。4課題中2課題は、毎回、同一課題(ト音譜表、ヘ音譜表各1課題)であり、別の2課題は、難易度が異なる課題を入れ替えながら用いた。4課題終了後、レッスン担当教員へ提出させた。
- ③4課題とも読譜課題の採点は、非常勤講師も含め8名の教員全員が、各自、担当学生の答案採点を行った。
- ④毎回、入れ替わる2課題の方は、採点後に個々の学生に返却し、満点になるまで反復して取り組むことを課した。学生には、修正した課題プリントを担当教員に再提出させ、各教員が必ず再確認を行った。

読譜課題の流れ

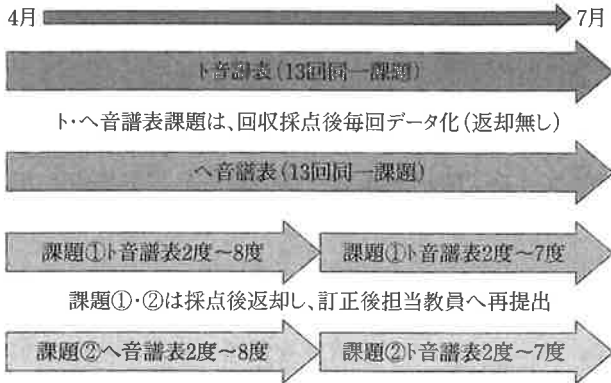


図1 読譜課題の実施方法

図1は、平成22年4月～7月にかけて計13回実施した、読譜課題について、図に表わし視覚化したものである。

6) アンケートの実施方法

この調査は、前期の最終授業日に実施し、事前にアンケート調査結果の活用目的についての説明を行うとともに、成績には一切影響しないということも予め伝えた上で実施した。本調査は、記名式で行った。

(調査項目)

このアンケート調査の内容は、下記の4項目である。

- ①前期開始当初、ト音譜表上の音をどのようにして読んでいたのか。
- ②前期開始当初、ヘ音譜表上の音をどのようにして読んでいたのか。
- ③前期最終回の時点で、ト音譜表上の音をどのようにして読むようになっているのか。
- ④前期最終回の時点で、ヘ音譜表上の音をどのようにして読むようになっているのか。

Ⅲ. 読譜課題について

1) 読譜課題作成に至る経緯

1年次生96名中56名(58.3%)が、ピアノ等の楽器のレッスン未経験者であったということから、本学の学生たちに、基礎的な読譜力(ドレミの階名読み)の育成は必要不可欠であった。そこで、読譜力育成を行う上で必要となる課題の作成についての検討を行った。市販されている読譜力を育成するための課題(楽譜)等は販売、作成されていたが、それ

表1 ピアノテキスト分析表

レッスン曲番号	ト音譜表		ヘ音譜表	
	最高音	最低音	最高音	最低音
1	一点ト	一点ハ	ト	ハ
2	一点ト	一点ハ	ト	ハ
3	一点ト	一点ハ	ト	ハ
4	一点ト	一点ハ	ト	ハ
5	一点ト	一点ハ	ト	ハ
6	一点ト	一点ハ	ト	ハ
7	一点ト	一点ハ	ト	ハ
8	一点ト	一点ハ	ト	ハ
9	一点ホ	一点ハ	ト	ホ
10	一点ホ	一点ハ	ト	ハ
11	一点ト	一点ハ	ト	ハ
12	一点ト	一点ハ	ト	ハ
14	二点ト	一点ハ	×	×
分散和音	×	×	い	ろ
15	二点ト	ロ	×	×
16	二点ト	ロ	×	×
17	二点ト	ロ	×	×
19	三点ニ	ト	一点ニ	イ
20	二点ホ	ト	一点ホ	ト
21	二点ト	ロ	一点ト	ろ
22	二点ヘ	ロ	×	×
23	二点ト	ト	一点ホ	ト
24	二点ト	ロ	一点ト	ト
25	二点ホ	一点ト	イ	ろ
28①	二点ハ	一点ハ	一点ハ	ハ
28②	×	×	イ	ろ
32	二点ホ	一点ハ	一点ヘ	ハ
34①	二点ヘ	一点ヘ	一点ヘ	ヘ
34②	×	×	一点ニ	ホ
36	三点ヘ	二点ホ	一点ハ	ホ
37	二点ヘ	一点ホ	一点ニ	ハ
40①	二点ト	ト	×	×
40②	×	×	一点ホ	嬰ハ
43	二点ロ	一点イ	一点ホ	ニ
45①a	一点イ	イ	イ	い
45①b	一点イ	イ	イ	い
45②	一点ヘ	嬰ト	×	×
47	二点イ	一点イ	一点ホ	ニ
48①	二点ニ	一点ニ	一点ニ	ニ
48②	×	×	ロ	嬰ハ
51	三点ト	一点ニ	一点ホ	ニ
54①	二点イ	一点イ	×	×
54②	×	×	一点ヘ	嬰ト
56	三点イ	一点ニ	一点ホ	ニ
57①	一点変ロ	変ロ	変ロ	変ろ
57②	×	×	ト	い
58	二点ロ	一点ニ	一点ヘ	変ろ
60①	二点ホ	一点ホ	一点ホ	変ホ
60②	×	×	一点ハ	ニ
バイエル100	三点ハ	イ	一点ニ	ヘ(ひらな)
弾き歌い曲	高音部付表		低音部譜表	
	最高音	最低音	最高音	最低音
ぶんぶんぶん 13	一点ト	一点ハ	ト	ろ
29とんぼのめがね	二点ハ	一点ハ	×	×
33思い出のアルバム	二点ト	一点ハ	イ	と
35たなばたさま	二点ハ	一点ハ	×	×
38ぞうさん	二点ニ	一点ハ	×	×
おべんとう	二点ニ	一点ハ	一点ハ	と
41うみ	二点ニ	一点ニ	×	×
44山の音楽家	二点ニ	一点ニ	一点ニ	と
49めだかの学校	二点ニ	一点ニ	×	×
52こいのぼり	二点ニ	一点ニ	イ	ニ
53まめまき	二点ニ	一点ニ	一点ニ	い

らが「本学の学生の実態に即し、効果的に読譜力を向上させるもの」であるか、という点に関しては懐疑的であった。

そこで、筆者等は、ピアノ経験が浅い本学の学生達の実態を把握し、限られた授業時数の中で行う読譜力育成を、より効果的に行うにはどうすればよいのかを熟考し、ピアノのテキストとの関連性を持たせた課題を考案した。

2) 読譜課題作成について

まず、課題を作成するにあたり、ピアノの授業で使用するテキストの中からピアノ曲と弾き歌い曲を分け、ピアノ曲のト音譜表（最高音・最低音）とヘ音譜表（最高音・最低音）について、それぞれ音域調査を行った。

以下に、調査を行ったテキストの表1とその詳細を記載する。なお、表中の×印の個所の譜表には音が無いことを表す。

表1によると、ピアノ曲50曲、弾き歌い曲11曲中、ピアノ曲のト音譜表における最高音は三点イ（テキスト56番）、最低音はト（テキスト19番・20番・23番・40-1）であった。一方、ヘ音譜表の最高音は、一点ト（テキスト21番・24番）最低音がバイエル100番のへ（ひらがな）であった。弾き歌い曲のト音譜表の最高音は二点ト（思い出のアルバム）、最低音は一点ハ（ぶんぶんぶん・とんぼのめがね・思い出のアルバム・たなばた・ぞうさん・おべんとう）であった。一方、ヘ音譜表の最高音は一点ニ（山の音楽家・まめまき）であり、最低音はと（思い出のアルバム・おべんとう・山の音楽家）であった。

表(1)にまとめた曲を概観すると、ピアノ曲の方が弾き歌い曲に比べ、ト音譜表とヘ音譜表ともに最高音と最低音の音域が広いことが明らかとなった。それに加え、弾き歌いの曲に関しては、ト音譜表の最高音と最低音、およびヘ音譜表の最低音の3つのカテゴリーに属する曲は、「思い出のアルバム」のみであった。これらから導き出された結果をもとに、今回は、弾き歌い曲より音域の広いピアノ曲のト音譜表の最高音三点イ・最低音トを読譜課題（ト音譜表・ヘ音譜表）の最高音・最低音として課題の中に入れ込むこととした。その理由は、ピアノ曲のト音譜表の最高音と、ヘ音譜表の最低音を課題の最高音・最低音とすると、上加線・下加線が増えすぎ見えにくい楽譜になることと、課題の難度が上昇しすぎる懸念されたためである。

3) 読譜課題の楽譜について

図2は、ピアノのテキスト分析を通して作成した、ト音譜表課題である。



図2 ト音譜表課題

この課題は、4分の4拍子で、臨時記号は用いず、4分音符を1小節に4つ配置している。各音程の配置は、音符をランダムに配置するのではなく、音程間隔が狭い（2度4度5度3度）部分と、音程間隔が広い（8度6度7度）部分の2つの音程の波を作ることで、テンポ良く課題に取り組みせる工夫を行い、問題の難度を均一化させるため、一定の規則性を有する2度4度5度3度8度6度7度の音程が常に循環する形を形成するように配慮した。また、ピアノ曲（ト音譜表）の最高音三点イは、第13小節目の第2音に配置し、最低音のトについては、第2小節目の第3音に配置した。これは、学生が課題に取り組む中で、最高音・最低音に数多く触れることができるよう、前半部分に配置するという工夫を行ったためである。

なお、学生たちは、この課題を4月から7月まで計13回それぞれ1分間という制限時間の中で取り組んだ。このト音譜表課題は、毎回同一問題（140点満点）を実施し、教員が回収・採点の後毎回データ化を行い、学生への返却は行っていない。



図3 ト音譜表課題冒頭4小節

図3は、ト音譜表課題の始まり4小節である。楽譜の冒頭部分に着目すると分かるように、①第1音 $\underline{\text{口}}$ から第2音 $\underline{\text{一点ハ}}$ （2度音程）②第2音 $\underline{\text{一点ハ}}$ から第3音 $\underline{\text{一点へ}}$ （4度音程）③第3音 $\underline{\text{一点へ}}$ から第4音 $\underline{\text{二点ハ}}$ （5度音程）④第4音 $\underline{\text{二点ハ}}$ から第5音 $\underline{\text{二点ホ}}$ （3度音程）⑤第5音 $\underline{\text{二点ホ}}$ から第6音 $\underline{\text{一点ホ}}$ （8度音程）⑥第6音 $\underline{\text{一点ホ}}$ から第7音 $\underline{\text{ト}}$ （6度音程）⑦第7音 $\underline{\text{ト}}$ から第8音 $\underline{\text{一点へ}}$ （7度音程）となっていることがわかる。その後も規則性のある音程関係を崩すことなく、3小節目、4小節目を経て最後の35小節目まで継続させた。



図4 ヘ音譜表課題

このヘ音譜表課題（図4）は、ト音譜表課題同様に4分の4拍子で、臨時記号は用いず、4分音符を1小節に4つ配置している。各音程の配置は、ト音譜表課題同様に、音符をランダムに配置するのではなく、音程間隔が狭い（2度4度5度3度）部分と、音程間隔が広い（8度6度7度）部分の2つの音程の波を作ることで、テンポ良く課題に取り組ませる工夫を行い、問題の難度を均一化させるため、一定の規則性を有する2度4度5度3度8度6度7度の音程が常に循環する形を形成するように配慮した。なお、学生たちには、この課題を4月から7月まで計13回それぞれ1分間という制限時間の中で取り組ませた。このヘ音譜表課題も毎回同一問題（140点満点）を実施し、教員が回収・採点の後毎回データ化を行い、学生への返却は行っていない。



図5 ヘ音譜表課題冒頭4小節

図5は、ヘ音譜表課題の始まり4小節である。楽譜の冒頭部分に着目すると分かるように、①第1音 $\underline{\text{下一点ろ}}$ から第2音は（2度音程）②第2音はから第3音 $\underline{\text{へ}}$ （4度音程）③第3音 $\underline{\text{へ}}$ から第4音 $\underline{\text{ハ}}$ （5度音程）④第4音 $\underline{\text{ハ}}$ から第5音 $\underline{\text{ホ}}$ （3度音程）⑤第5音 $\underline{\text{ホ}}$ から第6音 $\underline{\text{ほ}}$ （8度音程）⑥第6音 $\underline{\text{ほ}}$ から第7音 $\underline{\text{下一点と}}$ （6度音程）⑦第7音 $\underline{\text{下一点と}}$ から第8音 $\underline{\text{へ}}$ （7度音程）となっている。その後も規則性のある音程関係を崩すことなく、3小節目、4小節目を経て最後の35小節目までト音譜表課題同様に継続させている。

IV. 結果および考察

本稿においては、毎回同一の問題を継続して行った、同一課題（ト音譜表・ヘ音譜表）の採点結果を分析・比較することとした。これは、難度が固定された課題のデータ収集・分析を行うことにより、学生全体の数値の推移、個人の数値の推移状況の把握を行うためである。課題①・②については、課題の難度が毎回変化するため、同一課題のデータと課題①・②を単純比較することはできない。そこで、今回は、同一課題のみを掲載する。

1) ト音譜表・ヘ音譜表全体平均値

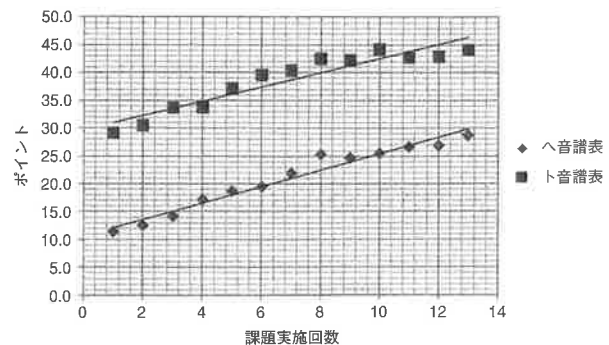


図6 ト音・ヘ音譜表課題全体平均値

図6は、13回実施したト音とヘ音譜表課題（同一課題）の13回全体平均値の推移を示したものである。

ト音譜表課題については、29.2ポイント（以下、ポイントはpと略す）から始まり、4回目（33.8p）まで緩やかに上昇している。5回目（37.2p）の数

値は、やや大きく上昇し、8回目(42.6p)まで数値の乱高下は見られず、上昇を続ける。8回目(42.6p) 9回目(42.2p) 10回目(44.2p) 11回目(42.7p) 12回目(43.0p) 13回目(44.1p)を見ると、数値の変化はあまり見られず、上昇が一旦落ち着いていると言える。

へ音譜表課題は、初回時(11.4p)から徐々に数値が上昇し、継続した数値の上昇が8回目(25.3p)まで続いた。9回目(24.7p)でやや数値が下がるが、その後13回目(28.8p)まで止むことなく上昇を続けた。

全体的にト音譜表・へ音譜表の数値は上昇し続けており、学生全体の平均値を見る限りにおいては、着実に読譜力が上がっていることが読み取れる。ト音譜表は、13回の課題実施において、初回時から7回目までの数値は、着実に上昇していた。また、特徴として7回目から13回目で数値が安定していることが表れていた。一方、へ音譜表は、初回から13回目まで数値の上昇が止まず、読譜力が今後もさらに伸びる可能性を秘めている。

ちなみに、今回継続的な読譜課題を実施した結果(1年次生)ト音譜表(同一課題)に関しては、初回時に階名が読めない学生が0名(0%)であった。へ音譜表(同一課題)に関しては、初回時に階名が読めない学生が37名(39.0%)最終回では1名(1.0%)であった。

2) 音楽経験者・未経験者の全体平均値

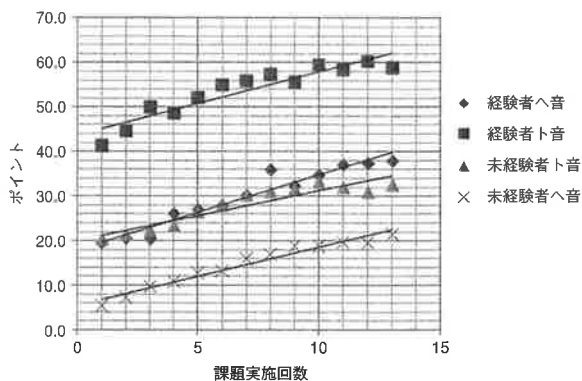


図7 音楽経験者及び未経験者における譜表課題全体平均値

図7は、音楽経験者(以下経験者)のト音譜表・へ音譜表の全体平均値と、音楽未経験者(以下未経験者)のト音譜表・へ音譜表の全体平均値を示したものである。図7における経験者とは、楽譜を読む経験が、義務教育の音楽の授業(9カ年)以外に経

験した者(ピアノや楽器のレッスン経験者、音楽系の部活動経験者)とした。また、未経験者とは楽譜を読む経験が、義務教育の音楽の授業(9カ年)のみの経験を有する者のことを指す。まず、本学学生の経験者40名(41.6%)の詳細についてであるが、大学入学以前に継続して1年以上のピアノ経験を有する者33名(34.3%)ピアノ等のレッスン経験は無いが、音楽系の部活動等のみ所属していた者は7名(7.2%)で、その内訳はブラスバンド部4名、ギター2名、バイオリン1名。また、音楽系の部活に所属し、なおかつピアノも習っていた学生は、13名(13.5%)である。また、未経験者については56名(58.3%)が在学している。

経験者のト音譜表に関しては、初回時(41.3p)であり、ト音譜表の初回時の全体平均値(29.2p)と比べると、高い数値から始まる。全体平均値よりも高い数値から始まり、徐々に上昇し少し下がり、また上昇する形であった。10回目(59.5p) 11回目(58.4p) 12回目(60.3p) 13回目(58.9p)となっており、数値がここで一旦落ち着いた。

経験者のへ音譜表の初回時は(19.6p)であり、全体平均値の(11.4p)と比較すると、ト音譜表同様に高い数値から始まる。3回目(20.4p)までは数値がなだらかに上昇し、4回目(26.1p)でやや大きな上昇が起こった。4回目(26.1p)から7回目(30.2p)まではなだらかな上昇を行い、8回目(35.9p)に再びやや大きな上昇が起こった。4回目の上昇と異なる点は、上昇した後、一旦数値が下がっていることが見て取れる。その後、数値はなだらかに上昇し、11回目(37.4p) 12回目(37.4p) 13回目(38.0p)と推移した。

未経験者のト音譜表初回時は(20.5p)であり、全体平均値(29.2p)と比較すると、低い数値から始まる。初回から4回目(23.3p)までは数値が徐々に上昇し、5回目(26.4p)で数値がやや大きく上昇した。その後、9回目(31.7p)まで緩やかに上昇し、10回目(33.3p)を頂点とし、数値が一旦下降して再び13回目(32.8p)となった。

未経験者のへ音譜表の初回時は(5.5p)であり、全体平均値の(11.4p)と比較すると、低い数値から始まる。初回から6回目(13.3p)まで数値は徐々に上昇し、7回目(16.1p)でやや大きく上昇する。その後、13回目(21.7p)まで緩やかに上昇を続けた。

音楽学習経験者のト音譜表・へ音譜表、未経験者

のト音譜表・ヘ音譜表のグラフはともに、初回時から13回まで数値が右肩上がりであり、その数値からも経験者、未経験者に関わらず読譜力を付けることが可能であると言える。特に、未経験者のグラフは、ト音譜表・ヘ音譜表共に数値が上昇しており、初回時ほとんど楽譜が読めない学生達が、13回のトレーニング実施後、大きく数値を伸ばしているという事実は、音楽の基礎力の底上げという点において大きな成果をもたらしていると言える。また、経験者のヘ音譜表の読譜力と、未経験者のト音譜表の読譜力がほぼ同程度という特徴が表れており、今後ピアノの指導や他の音楽活動の指導に活かせる可能性を秘めている。

3) 事例1 音楽経験無し学生 (男子)

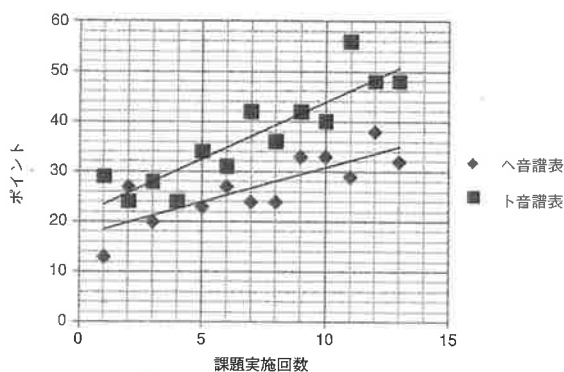


図8 音楽経験を有さない男子学生の読譜課題得点推移

図8は、大学入学までにピアノや楽器等のレッスンを経験していない男子学生の評価の推移を示したものである。

被験者のト音譜表の初回時は(29.0p)であり、平均的な数値であった。4回目までは、20p台で推移し、5回目に(34.0p)に達すると、その後得点の上下はあるものの、7回目(42.0p)11回目(56.0p)と下降線をたどることなく、13回目は(48.0p)となった。13回目の数値は、全体平均値の13回目(44.1p)を上回っていた。

ヘ音譜表の初回時は(13.0p)であり、全体平均値(11.4p)と比較すると、若干平均よりも高い数値から始まる。

2回目(27.0p) 3回目(20.0p) 4回目(24.0p)
5回目(23.0p) 6回目(27.0p) 7回目(24.0p)
8回目(24.0p) となっており、20p台が7回続き、9回目(33.0p)10回目(33.0p)11回目(29.0p)と大きな数値の乱れはなく、12回目(38.0p)と

大きく数値が上昇する。そして、13回目(32.0p)となっており、全体平均値の13回目(28.8p)と比べても上回っていた。

ト音譜表・ヘ音譜表ともに数値を細かく見ると、数値の上下はあるものの、初回から13回まで継続的に伸び続けている。全体平均値と比較すると、音楽未経験の学生でも、継続的に、読譜トレーニングを積むことにより、全体平均を上回る読譜力がつくことが可能である事が明らかとなった。

4) 事例2 音楽経験者 (男子)

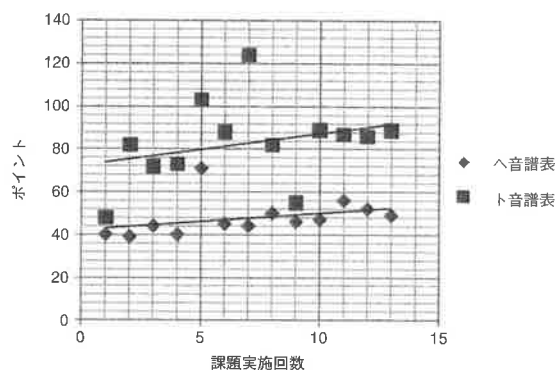


図9 音楽経験を有する男子学生の読譜課題得点推移

図9は、ピアノのレッスン経験が7年で、過去にブラスバンド部に所属し、サクソフォンを演奏していた男子学生の評価の推移を示したものである。

被験者のト音譜表の初回時は(48.0p)であり、全体平均値(29.2p)と比較すると、高い数値から始まる。2回目(82.0p)の数値は、初回時(29.2p)と比べて飛躍的に数値が伸びており、全体平均値の2回目(30.5p)と比較すると2倍以上の差が表れている。3回目(72.2p)4回目(73.0p)となっており、これ等はいずれも全体平均と比べると、高い数値であると言える。5回目(103p)では、全学生の中で唯一(100p)を超えていた。6回目(88.0p)は、やや数値が下がり、7回目(124.0p)となり、この数値は、全13回実施したト音譜表の読譜調査の中で最高得点である。また、7回目の全体平均値の(40.4p)と比較すると、3倍以上の差が表れていた。8回目(82.0p)9回目(55.0p)10回目(89.0p)11回目(87.0p)12回目(86.0p)13回目(89.0p)となっており、9回目を除いて安定した数値である。

ヘ音譜表の初回時は(40.0p)であり、全体平均値(11.4p)と比較すると3倍以上の差が表れている。2回目(39.0p)3回目(44.0p)4回目(40.0

p) となっており、上下の変動が少なく、数値が安定していると言える。5回目に(71.0p)となり、前後の数値と比べて大きな数値の変動が起こるが、6回目(45.0p)7回目(44.0p)8回目(50.0p)9回目(46.0p)10回目(47.0p)となっており、その後、緩やかな数値の上昇が起こっている。11回目(56.0p)12回目(52.0p)13回目(49.0p)と数値が下降している。しかし、全体平均値の11回目(26.7p)12回目(26.9p)13回目(28.8p)と比較すると2倍前後の差があり、決して低い数値ではない。

ト音譜表とヘ音譜表ともに高い数値で推移しているが、初回時と13回目を比較すると、いずれのグラフも上昇傾向にあると言える。音楽学習経験を有する学生であっても、継続的な読譜力育成トレーニングを続けることにより、効果を得ることが可能であることを示していた。

5) 事例3 音楽経験無し学生(女子)

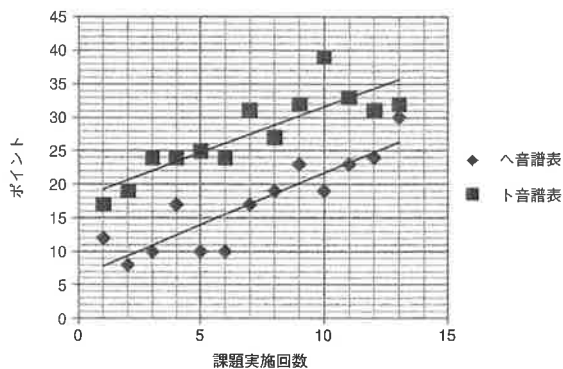


図10 音楽経験を有さない女子学生の読譜課題得点推移

図10は、大学入学までにピアノや楽器等のレッスンを経験していない女子学生のものである。

被験者のト音譜表の初回時は(17.0p)であり、全体平均値の初回時(29.2p)と比較するとやや低い数値から始まる。2回目(19.0p)3回目(24.0p)と少し数値が上昇し、4回目(24.0p)5回目(25.0p)6回目(24.0p)と大きな数値の変化がなく続いている。7回目(31.0p)に数値が上昇し、8回目(27.0p)はやや下がり9回目(32.0p)に再び上昇する。10回目(39.0p)に13回中最高数値となり、11回目(33.0p)12回目(31.0p)13回目(32.0p)は、上下の幅が少なく安定した数値で推移した。

ヘ音譜表の初回時は(12.0p)であり、全体平均値(11.4p)と比較すると、ほぼ等しい数値である。2回目(8.0p)3回目(10.0p)4回目(17.0p)5

回目(10.0p)6回目(10.0p)となり、平均的な数値で推移する中でやや高い数値が表れていた。7回目(17.0p)8回目(19.0p)9回目(23.0p)10回目(19.0p)11回目(23.0p)12回目(24.0p)13回目(30.0p)となっており、なだらかに数値が上昇を続けた。

ト音譜表・ヘ音譜表全体的に数値が右肩上がりでも上昇を続けた。また、ト音譜表初回時(17.0p)、13回目(32.0p)、ヘ音譜表初回時(12.0p)、13回目(30.0p)の数値の上昇幅からもわかるように、ピアノや楽器等の音楽経験を有していない学生であっても着実に読譜力が付いていることが示されていた。

6) 事例4 音楽経験者(女子)

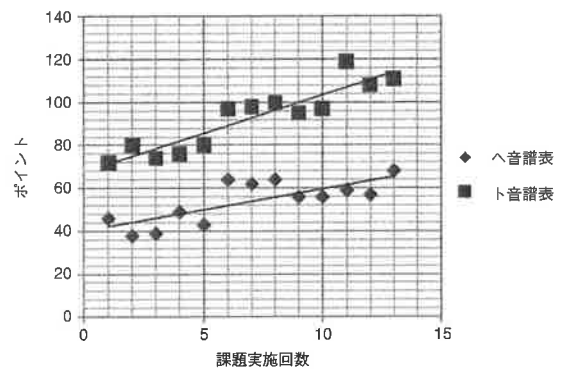


図11 音楽経験を有する女子学生の読譜課題得点推移

図11は、バイオリンの継続的な音楽学習経験を11年有し、ピアノのレッスン経験を1年間有する女子学生の採点結果をまとめたものである。

被験者のト音譜表の初回時は(72.0p)であり、初回時のト音譜表全体平均値(29.2p)と比較すると2倍以上の差が表れており、高い得点から始まる。2回目(80.0p)3回目(74.0p)4回目(76.0p)5回目(80.0p)となり、80p前後の数値で推移する。6回目(97.0p)7回目(98.0p)8回目(100.0p)9回目(95.0p)10回目(97.0p)に関しては、(90p)後半から(100p)の間で推移している。11回目(119.0p)の最高数値が表れ、12回目(18.0p)13回目(111.0p)となった。初回から5回目を得点群①、6回目から10回目を得点群②、11回目から13回目を得点群③として比較すると、得点群①は(80p)台で推移し、6回目の得点群②に入ると数値が上昇している。得点群②は、(90p)後半から(100p)の間で推移しており得点群①と比べると明らかに数値が上昇した状態が続いている。得点群③に入ると、

得点群①から得点群②に移る時と同様に得点が上昇し、得点群①・②よりも高い数値を維持している。以上のように、得点群が表れ、それぞれ段階的に数値が上昇しているという特徴が事例4女子音楽経験者のト音譜表では表れていた。

へ音譜表の初回時は、(46.0p)であり全体平均値(11.4p)と比べると4倍以上の差が表れており、非常に高い数値から始まる。2回目(38.0p)3回目(39.0p)4回目(49.0p)5回目(43.0p)となり、高い数値で推移している。続いて6回目(64.0p)7回目(62.0p)8回目(64.p)という数値で推移した。初回から5回目までと、6回目から8回目までの数値を比較すると、(30p)後半～(40p)後半の数値で上昇を続けていたが、6回目に入ると(60p)前半まで押し上げられ、高い数値を維持し続けるという特徴が表れていた。9回目(56.0p)10回目(56.0p)11回目(59.0p)12回目(57.0p)13回目(68.0p)となり、数値は緩やかに推移し、13回目に最高数値(68.0p)に達した。

ト音譜表・へ音譜表のグラフを全体的に見渡すと、音楽経験があるため、全体的に高い数値であることが見て取れる。しかし、経験が豊富にある学生であっても、グラフの数値が全体的に上昇しており、読譜力をつけることが可能であると言える。また、この被験者は幼少の頃よりバイオリン(旋律楽器)の経験を有している。バイオリンという楽器の特性上、ト音譜表で楽譜が構成されており、被験者はこれまで数多くト音譜表に触れる機会があったことから、特にト音譜表のポイントが高くなっていると考えられる。

7) 階名の読み方の変化

読譜課題に取り組んでいる時の学生の手元を観察していると、大きく3つに分けられた。①迷うことなく次々と階名を書き込んでいく者、②時々考え込む者、③ほぼ一音ごとに忙しく手元を動かして数えながら書き込んでいる者とが混在していた。特に、③に該当する学生たちは、ピアノ初心者によく見受けられた。そこで、今後、本学の学生の実情に、より一層適した新たな読譜課題を作成する際の検討資料として活用する予定であること、また、個々の学生への指導に活かすための目的として、学生たちがどのようにして階名を読んでいるのかに関する調査を行った。

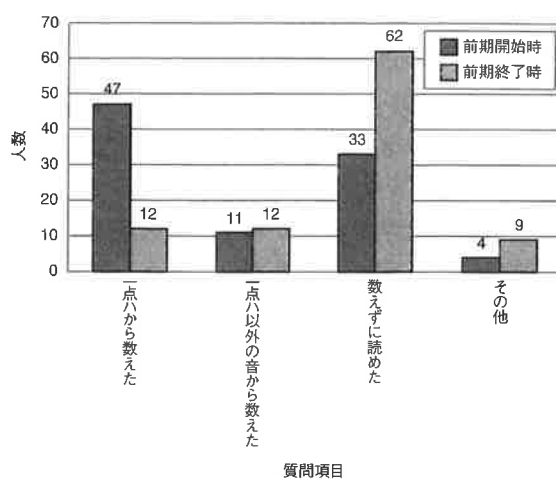


図12 ト音譜表の読み方について

8) 学生アンケート集計結果

①ト音譜表の読み方

図12は、学生たちがどのようにト音譜表を読譜しているのかを、前期開始時と前期終了時を比較し、図にまとめたものである。楽譜で最初に目にする音の階名が分かれば、次の音からはその音から順次数えていくこともできるのだが、「一点ハから数える」と答えた学生たちは、課題の最初の音だけを一点ハから数えていたというわけではなかった。つまり、あらゆる音を一点ハから順次数えている学生がいたということである。前期開始時、このグループには47名いたが、前期終了時には12名に減少し、35名の学生が他のグループに移行していた。この35名の記述の内訳は、一点ハ以外の音からも数えるようになったと答えた学生が12名、音を数えずに読めるようになったと答えた学生が23名であった。

「一点ハ以外の音から数えた」と答えた学生のアンケート用紙には、「五線上の音の一点ホ、一点ト、一点ロ、二点二の位置を覚え、それらの音から数えた」「一点ホから数えた」「一点トや二点ハからも数えた」等の記述があり、どの音から数えるかは個々の学生によって異なるものの、各自が読譜をする際の目印となる音を得ていた。このグループに属する学生数は、前期開始当初が11名で、前期終了時は12名であった。人数だけを見ると、さほどの変化は無かったかのように見受けられるが、被験者の氏名を確認したところ、実際には半数の6名が前期終了時には「音を数えずに読めた」グループへ移行し、その学生たちと入れ替わりに、「一点ハから数えた」と答えた学生がこのグループへと移行してきていた。

「数えずに読めた」と答えた学生は、前期開始時に33名だったのが、前期終了時には62名へと倍増し

た。新たに加わった29名の学生の内訳をみると、前期開始時に「一点ハから数えた」と答えていた47名中の20名と、「一点ハ以外の音から数えた」と答えていた11名中7名が移行していたことに加え、「その他」に属していた学生で「楽譜が読めなかった」と記述していた学生の中からも2名の学生が、前期終了時には数えずに読めるグループへと移行していた。

「その他」に該当する学生は、前期開始時に4名、前期終了時には9名いた。前期開始時の4名の記述内容は、「数えずに読める音もあるが、読めない音もある」と答えた者が1名、「楽譜を読めなかった」と答えた学生が3名いた。この3名は、いずれもピアノ未経験者で、音楽系部活動経験も無く、高等学校での音楽の履修もしなかった学生であった。前期終了時に「その他」に該当した学生は9名おり、全員が「数えずに読める音もあるが、読めない音もある」と答えた。この中の3名は、前期開始時に「楽譜が読めなかった」と答えた学生たちであったが、前期終了時には数えずに読める音もあると答えるように変化していた。

②へ音譜表の読み方

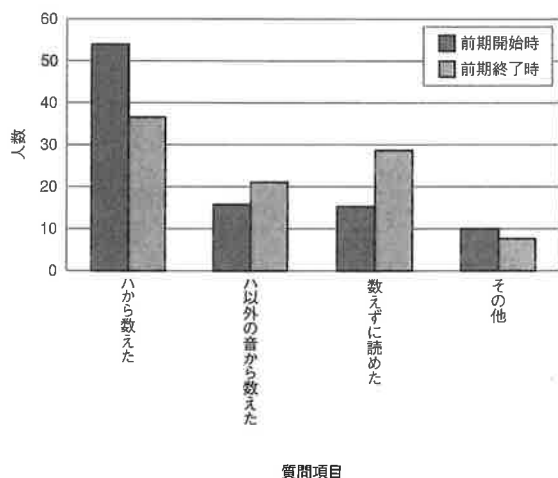


図13 へ音譜表の読み方について

図13は、学生たちがどのようにト音譜表を読譜しているのかを、前期開始時と前期終了時を比較し、図にまとめたものである。

ト音譜表の結果と同様に、読譜の際にはハ以外の音よりも、ハを基準にして数えている学生が多い。

「ハから数えた」と答えた学生数は、前期開始時には54名いたが、前期終了時には37名に減少し、それに伴い「ハ以外の音から数えた」や「数えずに読

めた」と答える学生が増加した。

「ハ以外の音から数えた」と答えた学生たちの記述には、「と」「二」「ホ」「へ」「ハとへ」「いとハ」「ハとホとト」の位置を覚えているので、そこから数えたと答えていた。

「数えずに読めた」と答えた学生数の変化を見ると、前期開始当初の15名が、前期終了時には29名に増加した。しかし、前期終了時のト音譜表の「数えずに読めた」と答えた学生数(62名)と比較すると、へ音譜表はト音譜表の半数にも満たないという結果となっており、へ音譜表の人数の方が圧倒的に少ない。ピアノを弾くためには、へ音譜表においてもト音譜表と同等の読譜力を身につけることが求められるのだが、このデータから、学生たちはへ音譜表の読譜に相当苦勞しているという現状を抱えていることが読み取れる。

V. おわりに

今回の取り組みでは、ピアノのテキスト調査を行った上で、読譜課題の考案とデータ分析、学生の視点からみた楽譜の読み方について様々な角度から考察を行った。データの分析結果からは、ト音譜表課題・へ音譜表課題ともに数値が大きく上昇しており、4分間という短時間の取り組みであろうとも、適切な課題と教員の援助のもと、「読譜力向上に向けた取り組み」を行えば、有益な結果が表れると言える。そして、この取り組みをできるだけ早期に行うことで、学生達は、音楽の授業、演奏活動等で基本的な音楽の力となる「楽譜を読む」ことにつまずきを感じることが少なくなることが期待できる。また、課題を採点するという行為を通じ、各教員が学生たちの読譜力の現状と課題を知ることができたことは、知識や技術を陶冶する際、学生の実態に即した指導助言を伝えられると言える。

しかし、今後の課題として次の5点の改善課題が挙げられる。①停滞した数値を上昇させるための工夫に対する追跡調査の必要性②新しい要素を取り入れた課題作成(リズム、和音、視唱等)③読譜課題に取り組むための学生に対する意識づけの方法④へ音譜表の読譜力育成方法の検討⑤難度が異なる課題のデータ分析。今後は、これらの要素を鑑みながら、本学の学生達にさらなる読譜力を身につけさせる必要があると強く感じた。

最後に、限られた授業科目や授業時数の中で学生

に様々な音楽技術・知識を陶冶し、教員採用試験や就職試験等の目標に向かわせる際、学習初期段階において読譜力の育成に注力することは、養成校における喫緊の課題であるということを改めて痛感した。

付記

本論文は、(日本学術会議 協力学術研究団体) 全国大学音楽教育学会九州地区学会 第26回 研究学会において研究発表を行った成果の一部である。

謝辞

本研究において、読譜課題の採点に協力下さった本学子ども学科非常勤講師(ピアノ)の先生方へ厚く感謝申し上げます。

VI. 参考文献

- 1) 野口美乃里：保育者養成校における楽典指導に関する一考察 西九州大学短期大学部研究紀要 第40巻 2010。
- 2) 白川浩：音楽的なピアノ演奏へのプロセス(その1)―読譜から演奏に到るプロセスの可視化をとおして― 鳥根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 第47巻 2009。
- 3) 中山由里：ピアノ教育の導入期における授業についての一考察―ピアノ学習初心者への講座を通して― 九州女子大学紀要 第44巻3号 2007。
- 4) 小倉隆一郎：Music Laboratory を用いた初心者へのピアノ指導―読譜力の向上に着目して― 『教育学紀要』文教大学教育学部 第41集 2007。
- 5) 小池美知子・上村聖子・木村真由美：保育者養成における鍵盤楽器指導に関する研究(3)―読譜力育成のための指導について― 今治明德短期大学研究紀要 第29集 2005。
- 6) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 音楽編 教育芸術社 初版発行 5頁 2008。
- 7) 全国大学音楽教育学会・九州地区大学音楽教育学会編：新しい表現を取り入れた、保育者養成のためのピアノテキスト 株式会社 河合楽器製作所・出版部 2009。
- 8) 小林美実：こどものうた200 チャイルド本社 第91刷発行 59頁 2008。